

随筆
ひざ小僧

道筆ひざ小僧

秋山安三郎

雪華社

隨筆 ひざ小僧

一九六六©

昭和四十一年九月二十日

印刷

昭和四十一年九月二十五日

発行

定価 三八〇円

著者

秋山安三郎

発行者

栗林茂

印刷所

日本製版株式会社

発行所

株式会社
雪華社

東京都中央区京橋一の七
電話東京五六一六八三八
振替口座東京四二二五〇

(落丁本・乱丁本はお取替えいたします)

随筆ひざ小僧
目次

今年

漫画の美女に惚れて	6
初めが肝腎	18
百年前の夏	21
「黙阿弥全集」に添えて	26

去年

真夏のはなし	32
シャツの神様	35
ことしの「初湯」	37
妻をたしなめて	40
年の瀬の「浅草」	47
「東海道線旅行図会」	51
水の中から	54
私の日章旗と「猿之助」	57

十年前

さんまに思う	62
うぬばれ迷信	64
鍋	68

三筋町の子供たち	71
こおろぎの声	74
東京ッ子の不平	77
東京ッ子の嘆き	80
山ほととぎす	82
早く弁慶になりたい	85
餅と漢字制限	88
酒ぎらいの酒	90
二つの告別式	93
虎造の消えて行く日	98
数の子	100
劇評の裏	102
おでん・きんつば	106
めぐり合せ	107
言葉あれこれ	110
おでん・タコ焼き	113
うどん録	116
新聞の劇評というもの	119
映画「瀬東綺譚」のこと	122
親の慈悲	124

二十年前

縁台ばなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126

みんな年のせい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129

劇評家日記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132

東京のすし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136

新聞の内輪ばなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139

糞生涯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151

消えていく東京弁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155

演劇記者まかり通る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157

地震と新聞と・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160

パチンコの玉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・166

演劇界手帖ぬきがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171

「敗戦後」の梅の花・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207

青葉日記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・210

社長さんの話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・228

いかめしき女給さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・230

終戦直後のはなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・239

〃幫間〃喜兵衛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・246

毎日思ふこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・249

今

年

漫画の美女に惚れて

八十爺さんの新婚生活

「銭形平次」の野村胡堂さんが亡くなったのは昭和三十八年四月十四日である。亡くなる数年前どういう思いつきであったか、平常は疎遠になっている旧友や知人を集めて、氏の宅で一夜の招宴をしたことがある。その時私もその一人に呼ばれてご馳走になったが、宴が果物になるころ、野村さんが、「ねえ、秋山君に頼みがあるんだよ」

と切りだして漫画家清水崑への橋渡しを頼まれた。つまり清水崑が描くところの唐美人の画が欲しくて堪らないのだ。色紙でも半折でもいいから一枚、特別に念を入れたやつを描いてもらえないか、ということである。そう聞いて私もハッと共鳴するような気になった。

まことに当時、さかんに紙上に出ている清水崑の漫画唐美人の色の白さ、豊頬、まなざし眸の色ツばさは中年男子を魅了するものだった。（なるほど性欲衰弱の年齢の者が誰も欲しがるものなのか、と自分も加えて）その時、私も思ったのだった。

崑さんは、私と同じ新聞社に勤めているので、そこをねらって、野村さんが私への依頼である。

野村さんの依頼は、それから間もなく遂げられた。画箋半折の唐美人で、少し品が良過ぎた、と私には思われもしたが、野村さんが喜んだことは、崑さんへの礼手紙で分った。

それを崑さんが描いてる時、筆馴らしにまず一枚、傍らの色紙を取って「唐美人」を描いたが、これは書き損じだと言って崑さんが紙屑籠へ捨てた。それを私が貰ってしまった。

案内嬢たちのペーソス

野村さんとの話はこれでおしまい。ところがそれから月を経て、或る劇場でこの生きてる唐美人に私は逢ったのである。むろんその類型、色紙の唐美人に似ている！というだけで、清水崑のそれとは大分距^{へだ}りはあるが、ともかく、あれは画、これは生きてる、と思えば無論生きてるというだけで我慢ができる娘さんである。制服を着た若い娘さん。

元来私は、自分が貧乏育ちのせいもあって世の中の弱いモノに味方し勝ちである。だから劇評論家などとタテられて東京中の劇場へ出入りしていても、むろん底が女好きの性が十分に手伝ってるせいもあるが、劇場で働く若い娘さんたちの案内嬢に同情が湧くのである。

つまり他人の歓楽に奉仕する生活、恐らくは自分たちと同年配のお嬢さん、時には奥さんと称^よばれる階級の同性が、綺羅を飾り、流行を銜^てって観劇に来るのに、唯々としてこれを迎えなければならぬ卑屈感。そんなものを常に感じてゐるのじゃないか、という同情。

第一に人が楽しんでる日に、働いていなければならぬという貧しい生活！ そんな同情の対象の

中に「唐美人」を発見したのである、当然私は接近した。

それだけでなく、そういう甘い心の私には彼女らが、どこの劇場でも親しみをを見せていた。或る劇場で、夏の暑さであったが、満員なので入口近くに立って見ていると、うしろから軽く肩を叩くものがある。薄暗がりの中でふり返って見ると、これがこの劇場の案内嬢で「これ！」と言ってアイスクリーム一つ持って来てくれ、「椅子、空いたのがありますわよ」と、そこへ案内してくれたこともある。彼女らを、三人四人と連れ、劇場がハネた深夜に、彼女らがお馴染みのお好み焼屋に同座したこともあり、鮎屋^{すし}へ行ってつまみ合ったこともある。私が酒をたしなまぬのでこんな場合でも世間が一応心配するようなことは起らない。

私としては、もし綺麗ごとだけで説明すれば、つまり平常^{ふだん}同情している自分の心を、こんなわずかなど馳走で甘やかしているのだ。そんな時、一人の案内嬢が、

「先生（劇評論家への敬称）、いいモノ見せるわ」

と言ってハンドバッグから自分が写ってる訪問着姿の小判の写真を見せた。

と、一緒に来ている朋輩たちが

「先生、私のも」

「私も」

という具合でみんなが同じような写真を私に見せた。そして最初に写真を出した娘が、

「これ本当は、こんなにみんなを出して見せるもんじゃないのよ。一人だけで見てもらうモンよ。だって、みんな一つ訪問着でしょ」

と私に注意を促した。なるほど、どこかで借り衣裳した女の欲しがる訪問着を、朋輩が四人も五人も、代りばんこに同じものを着て写真に写うつしているのだ。

この時も彼女らが欲しがり、あこがれてるものが分つて、私には実は涙を呑む思いがした。冬が来て、外套が買えない娘だけが自然に呼応し、

「びくびくしないで、外套無しの私たちだけのグループ作りましょうよ。で、元気よくさ、毎朝、職場の挨拶を、こうして挙手して『オーッ』とやりましょうよ」

と血盟していることも聞いた。ビールの好きな案内嬢がいて、芝居の昼の部と夜の部の間の僅かの時間に、この案内嬢たちが総出で観客席の大掃除をする時、昼の部だけで帰った大きな団体客の椅子跡に、まだ栓を抜かないビール壺一本がころがっているのを見て、そのビール好きの娘が直ぐ栓を抜いて口へ当てた。三分の一どころまで呑みこんでる時、朋輩の一人が声を上げて、「あら、それ、もしかしたら小便じゃない？」

と叫んだので、呑みこんでた娘が思わず呑み掛けのものを吐き出した。ということも聞かされた。空壇へそんなことをして行く客も、無いではないそうである。

亡父を慕うがごとし

何しろ私の劇評家生活も数十年間続いているので彼女らは友だちである。いい具合に時間が合致した時は、雨の夜、雪の夜に、私を迎えに来る新聞社の自動車へ、彼女らを同乗させてそれぞれの帰宅を送り届けたことも続いている。そのうち私は、私の「唐美人」に惚れてしまったのである。

唐美人と私との接触の始まりは、

「先生はどちらの新聞社？」

「あれ、今頃になって？　今まで知らなかったの？」

「ええ」

私が自分のところの新聞の名を言うと、

「あらそうですの。じゃ先生の劇評読んでないわ。うち読売だから」

「読んでくれよ」

「でも新聞代、惜しいわ」

「ケチいうなよ。新聞代くらい、僕が払ってもいい」

「本当！　じゃ直ぐ取るわ。私ね、先生方の劇評、大概切抜いてありますのよ。だから新聞の名のところは無くっても、どなたの評か、直ぐ分りますのよ。ああ先生ケーキ召上がる？　先生の分、とってありますよ」

と言って、自分の持ち場のテーブルの抽出しから、薄い懷紙にくるんだ洋菓子の一つ、大切に

くれたのが初めだった。その応接振りの可愛かったこと。

それが私の病みつきである。ちよいと優しいこと、可愛いことをされると直ぐ『この女、俺に惚れてるナ』と思うことが私の例になつてゐる。また、それが大概当つてしまうことになつてゐる。

自宅へ戻ると、一度仕舞つてしまつた崑さん描き損じの「唐美人」を出して、これを壁に懸けて眺めることが多い。画を見ているんだから妻には分らない。が、私は画から、当然私の密かなる唐美人を連想しているのだ。よくもこう雰囲気似てゐるものだ、と。

惚れた、となれば遂行しなければならぬのが男の常だ（女もそうであろうが）。或夜、遂に、どちらが誘つたともなく遂行した。この辺をもっとこまかく書くことが、読む人の興味であろうが、許されい。さすがにテレ臭い。

それからデートが続く、重なれば重なるほど私は彼女への性的思慕が濃くなる。ちやうど安藤鶴夫君が「尻尾^{しつぽ}まで餌の入つてゐる」四谷の鯛焼きを推奨してゐる時分だったので、私はこれを彼女へのみやげに買い、その函を抱えて初めて彼女の住宅を伺つた夜もあるが、いや待てよ、鯛焼きなんて駄菓子である。駄菓子のみやげがふさわしい一家と思われたのかと、彼女はそう思わなくつても、母なる人や弟妹の家族に思われては大変なことになると考へて、折角その門口^{かどぐち}まで行きながら、でも食べるには食べるだろうと、鯛焼詰め^{かどぐち}の函だけその格子先へ置いて、誰から贈られたものとも知らさずにそのまま逃げ帰つて来てしまつたこともある。実はむろん、一目、唐美人の顔が見たかつたのである。

二度目に図々しさを冒して、思い切つてこの家へ逢いに行つた時は、いい按配に母、弟妹にたとえ表面だけでも歓迎されたが、彼女が突然の来訪にトチつて、私へビールの肴に、くさやの干物を供してくれたのはよかつたが、醬油と間違えて、黒蜜のどろりとしたのを干物にかけて出されたのには呆れてしまった。

そんなことがあつても、くさやの干物や、黒蜜がふだんにも備えてあることを知つて『ははアこのうちは江戸ツ子の家系だなア』とうれしくなつたこともある。うれしがりようは惚れてしまえば菊石あばたもえくぼの、クチかもしれない。

彼女の住いと私の住宅とは、大体東京の隅から隅へ位の距離があつた。タクシーなら約千円、電車なら三、四度乗り替えて行く。彼女らの劇場が休演で、劇場では彼女に逢えない時に行くのである。

この当時、私は実は六十七歳、彼女は二十三歳であつた。

こう数字を並べてみると、突き飛ばして「お爺じいさんが孫娘でも追駈けてる」ように見えるので、全く忸怩じくじたる思いがするが、いいことに外見の私の年齢は四十歳代にしか見えない評判を常に聞いていて、それで僅かに、自分の恥を糊塗している。だから実は、彼女が私へ甘くなつたのも、彼女が常に亡父を慕つてゐる内心が、作用してゐるものなかと、これは私の内心で割切つてゐる。

笑い噺のタネをまく

話を少し飛ばしましょう。だから一昨年十一月私が彼女と正式に結婚すると、しばらくの間はその

ことを知らなかったが、やがて今年に入つて友達、知己の間で「八十男と、孫のような若い女が夫婦になつてゐる」と笑い噺のタネになり出した。

覚悟の上であるが、前記のわけで急に八十歳と今はもう三十七歳が結婚したわけではなく、既に十三年前から出来てゐる男・女が、男八十歳になつてから友達、知己に知れたのである。

もっとも友達の知己の一部に私たちのことが知れたのは、進んで知らせたという、私の一種の悪戯（いたづら）もある。それは、顔見知りが集る招待の宴会やパーティがあると、彼女同伴で行くのである。つまり自分では費用を負担しない結婚披露でもあるが、半分は自虐、自嘲の滑稽観を提供するため、半分は、いくら若く見えても、年齢（とし）はどうにもならない、実は八十歳の男が、こんなに若く潑刺（しやくし）とした女を妻に持てるんだ、という人生の自慢である。招待は私へだけだから同伴の彼女は招かれざる客である。その点でいつも彼女はたじろいてはいたが。――

前の妻も、やっぱり二十三違いの実際には若女房であつたが、同棲約三十年の末期――、唐美人との交渉中、そんなことはちつとも知らずに病歿したのである。それから今度の入籍まで、四年を経てゐる。

家へ迎えてみると、八十歳の亭主は露骨に若い妻との時差を感じてゐる。まことに現代の女性だ。自分の思うこと、したいことをパキパキ、ズバズバと進行する。顧慮とか、遠慮とかがない。

私は強いて社会的の理窟を付けて、テレビは一万円台で買えて、向うの家にも、隣りの家にも軒並

みに備えられる時機にならなきやウチへは備えないと頑張つて、テレビ無しの家庭であつたが、彼女の新妻が来ると、

「そんなこと言つてると、ズレてしまうわよ」

と言つて、自分が持つて来たらしい貯金帳のうちから忽ち立派なモノを備えてしまった。

なるほど、もう軒並みテレビがあるような街である。ウチはそれまでガス冷蔵庫だつたが、それも彼女が電気冷蔵庫のでつかく、新しいのに替へてしまった。実家からは、それまでウチに無かつた洗濯機を届けて来る、その他、あれこれと、わが家の台所はいわゆる電気化になつてしまった。みな彼女の貯金払いである。そして、やたらに先妻の物を処理したがる（これはもつとも至極だ。と亭主は黙過已むなし）。

ここで解説が必要になつたが、初め、劇場に働く若い制服の娘たちを、貧しい家の子たちと思つたのは、私の甘い世間観だつた。

劇場で働くこの女の子たちの一軒の家が、近所からの火事で類焼したと聞いて、私は千円の見舞金を包んで現場へ赴いた時があるが、その時焼け跡で立ち働いていたその女の子が、母親がしまつて置いた現金二万円を燃やしてしまつた、と嘆いていた。私は、

「燃えた灰がそっくりしているなら、銀行で現金に替えてくれるはずだぜ」

と励ましていたが、心では家庭に二万円も普段に持つてゐるのに驚いていた。私の家庭など、その